小栗上野介情報80

ホームページHttp：//tozenzi.cside.com/　Eメール：tozenji@clock.ocn.ne.jp

2021(令和3)年9月
発行:東善寺　住職　村上泰賢
群馬県高崎市倉渕町権田169
〒370-3401
Tel･fax:027-378-2230
〒振替00120-1-406206東善寺

日本初の 小栗上野介の株式会社　三つ

坂本龍馬の「海援隊」が日本初と命名した経済学者坂本藤良教授は、後に「小栗上野介の兵庫商社こそ定款と役員を供えた日本初」と訂正している。『小栗上野介の生涯』坂本藤良

１兵庫商社　２築地ホテル　３小布施の船会社

（日本初の株式会社１）

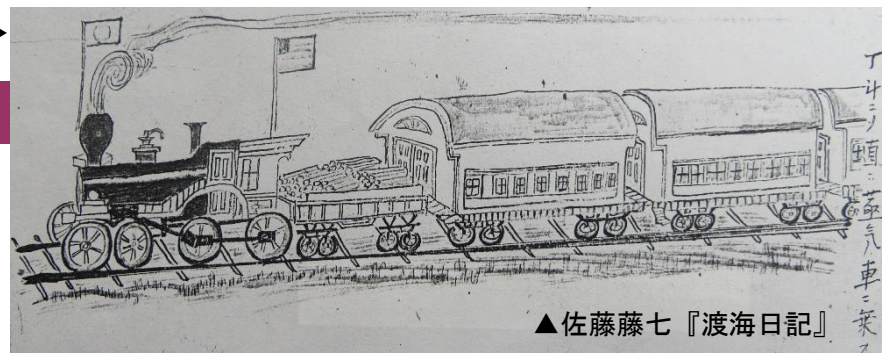
■兵　庫　商　社

慶応三年（1867）、小栗上野介は日本最初の株式会社「兵庫商社」の設立建議書を提出した。万延元年（1860）に遣米使節として渡米の折、パナマ鉄道で説明を受けた鉄道会社（コムペニー）の仕組みが活かされている。

『小栗忠順従者の記録』よりパナマ鉄道

▼『広辞苑』では「商社」という言葉を「小栗上野介が訳した語」として説明している

【商社】（Companyを小栗上野介が訳した語）商業上の結社。自国における外国商社、外国におけるわが在外商社など、貿易上多く使われる言葉　**▲岩波書店「広辞苑」より**



▲佐藤藤七『渡海日記』

兵庫商社　設立建議書（要旨）

「兵庫（神戸）を開港するについて、これまで長崎・横浜を開いてやってきたが、西洋各国が港を開いて利益を得ているのに反し、日本は開港するたびに国の損になっている。これは商人組合のやり方をとらないで、薄元手（小資本）の商人一人一人の損得で貿易を行ない･･･薄元手の商人が互いに競争で外国商人と取引するから元手厚（大資本）の外国人に利権が奪われてしまう。」

「これは商人一人の損失ばかりか、結局国の損失になり、ついに全国の利権を失し、外国商人のために蔑視され･･･」てしまう。だから「外国人と取引するには、外国貿易の商社（西洋名コンパニー）のやり方に基づかなくては、国の利益にはならない」

（『幕末外交談』田辺太一／『読史余録』塚越芳太郎／意訳　）

そしてコンパニーの利潤をもってガス灯や書信館（ポストオフィシー・郵便電信制度）、鉄道の設置をすれば、国にとっての膨大な利益となる、と提議する画期的な構想であった。

（『徳川慶喜公伝３』渋沢栄一）

出資者を２０人の大坂商人とし、100万両の資金を出資させる。ただ出資させるだけでは商人は動かないから代わりに同額の金札発行を許可し、利益が出るようにする。商社の役員は頭取の山中善右衛門（鴻池屋）ら３名、肝煎りに６名の商人、残りの１１名は世話役とする構成。商社の事務所は商社会所と呼ばれて大坂中之島（西端）に置かれた。

「次郎作御用掛の一員として商社の設立に尽力し、六月商社設立の議其実行を見しや、十四日商社の諸役を大阪総会所に招き、商人一人の私利を旨とせず、、西洋商人より高利の金銭を借らず、協同一致して貿易の盛大を図るべしと諭し、備金に関しても亦演達する所あり。」（『神戸市史』別録ｐ44・「加納（嘉納）次郎作」）

＊加納次郎作は嘉納治五郎の父

◆明治維新の混乱で不馴れもあって解散してしまった。

【参考書籍】『読史余録』塚越芳太郎（停春楼）著／『徳川慶喜公伝』渋沢栄一著龍門社／『小栗上野介の生涯』坂本藤良著／『幕末外交談』田辺太一／『神戸市史』別録／『小栗忠順従者の記録』村上泰賢

（日本初の株式会社２）

■築地ホテル

清水喜助

勘定奉行小栗上野介が江戸の町人を集め、

「今度江戸に外国人が住むことになる。ついてはホテルが必要だが、幕府は金がない。土地をただで貸すから、ホテル組合を作って町人から資金を集めてホテルを建設し、出来上がったあとは利用賃で運営し、運営費以上に利益が出たら資本を出した者で分配してよい。誰かやる者はいないか―」　『平野弥十郎幕末維新日記』北海道大学

という話があった。パナマ鉄道の経営と同じ株式会社の手法である。手を挙げたのが清水建設二代目の清水喜助。小栗上野介はホテルの規模内容は外国人に満足のゆくものを意図して、これを建設させた。彼の頭には、かつてワシントンで泊まったホワイトハウス近くの超一流ホテル「ウィラードホテル」が思い描かれていたに違いない。

水洗トイレつき

着工：慶応三年八月～慶応四年八月完成　二階建て、部屋数102室、水洗トイレ、シャワー、バー、ビリヤード室つきで江戸から名を替えた東京名物の評判となり、錦絵が飛ぶように売れた。　◆明治5年銀座の大火で類焼失したのが惜しまれる。

（ 日本初の株式会社３ ）

■小布施の船会社

「信州の小京都」といわれる長野県小布施町の高井鴻山は豪農商・画家・学者として知られる人物。晩年の北斎が4度も小布施を訪れてたくさんの絵を残したのも、鴻山が招いたから。

新潟の港に船会社を興し、地域の物産を運んで外国人に販売し、資本家だけでなく農民や工芸職人もうるおう「国民利福」の道を探る…構想だった。明治維新で小栗上野介は勘定奉行免職、幕府は解散となり、幻の船会社で終わったが、信越にも株式会社が芽ばえはじめていたことがわかる。

船会社設立案　建議書（要旨）

小布施の高井鴻山が幕末に松代藩に提出した「船会社設立案」建議書が町（教育委員会）に残る。

「信越の富豪が結社して船会社を作り外国交易を行なえば、地域の物産振興、富国強兵につながる国民利福を図ることとなる」
「船はとりあえず（幕府の）官船を借用し、米人ウェンリイ（ヴァン・リード）の指導を受けて運転・交易の指導をしてもらう…」
「これは小栗上州御（勘定）奉行から示唆を得たもの」だった。

明治以来の薩長史観では「小栗の株式会社は幕府が貿易の独占を図った」と曲解されてきたが、「**国民利福のための船会社**」設立であることを、ここで確認しておこう。新潟でこれに呼応した人物は誰だろう、今後の研究課題である。

慶応四年一月小栗上野介が勘定奉行を罷免されたためこの案は幻の船会社で終わったが、そのことを悲しんだ鴻山は、幕府解散に際して会計総裁に任じられた大久保一翁（忠寛）からの、至急江戸へ出てきて手を貸してほしいという招きに応じず、代りの使者を駿河台の小栗屋敷へ送って罷免慰労の挨拶をさせている。
「小栗公がいない江戸へ行っても、何ほどのことがあろうか」と受け止めている高井鴻山の落胆が痛いほど見えてくる。
【参考書籍】　山崎實著『高井鴻山物語』『続高井鴻山物語』・「船会社の提案書」は小布施町教育委員会蔵／『小栗忠順従者の記録』村上泰賢／

三百年平和の恩を忘れない者

小栗上野介が慶喜に罷免され、許可を得て権田村に「帰農土着」する直前、渋沢成一郎が訪ねてきて彰義隊隊長に着くよう依頼されるが、断っている。主戦論を唱えながらなぜ、と言われるところだが、「将軍が立ち上がらない以上、大義名分のない戦はしない」といって断った。（『維新前後の政争と小栗上野の死』蜷川新）　儒学では、「主君に三度諫言して之を容れざれば、之を去る」として「これほど言っても聞き入れない主君はこちら（家臣）から去る」と教えている。俗に言えば慶喜に愛想を尽かした、この人では戦っても無駄になる、という気持ちであろう。勝海舟は恭順論の平和派、抗戦を主張した小栗上野介は主戦派と単純に決めつけるのは早計で「だから小栗は西軍に殺されて当然」と殺害の正当化に利用される恐れがある。

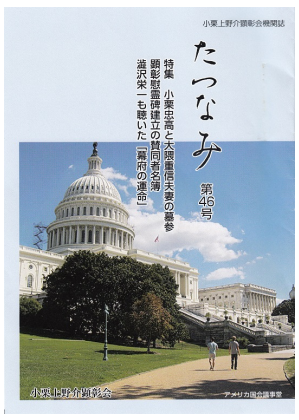
小栗は 渋沢にこうも言っている 「（政権交代後に）もし強藩が互いに勲功を争い内輪もめとなって群雄割拠するようなら主君を奉じて天下に檄げきを飛ばすつもりはある」として
「三百年に亘って施した**徳川家の恩沢をまだ忘れない者**も多くいるであろうから…。またそのようなこと（群雄割拠）がなければ自分は前朝の頑民として田舎で世を送るつもり…」と。
以前から「恩沢を忘れない者」として小栗が誰をイメージしていたのか課題であったが、岩松院境内の高井鴻山頌徳碑に
「吾ら三百年の驩虞（かんぐ）の沢を受く、宜しく資産を挙げて以て危急を救うべし・・・」　＊驩虞…歓び愉しむ　とする鴻山こそ小栗上野介のイメージを体現した人物の一人と言える。

二人が江戸―北信小布施と離れながら、互いに心を通わせて、国事に心を痛めていたことを物語る貴重な石碑、と言えよう。

高井鴻山頌徳碑徳と「解説板」に小栗上野介の名が登場する。岩松院境内

情報あれこれ

◆小栗上野介顕彰会機関誌



『たつなみ』４６号発行
特集　小栗忠高と大隈重信夫妻の墓参
顕彰慰霊碑建立の賛同者名簿
渋沢栄一も聴いた「幕府の運命」　ほか

忠高の命日にナゾ　息子忠順に影響を与えた忠高の人物、業績がかなり明確になった。そのなかで、新潟奉行赴任中に病死した忠高の命日が従来の1855安政二年七月二十八日でなく、なぜか実際は七月十日らしい、というナゾが生じてきた。

◆NHK大河ドラマ「青天を衝け」

渋沢栄一の物語にしばしば小栗忠順が登場して、幕末の日本近代化に活躍する姿を見せ、「幕府側にこんな人がいたのか!」と驚いた参拝者が増えています。俳優武田真治の小栗忠順役が、いい雰囲気を出していて「ホンモノみたい」という声も。ここでも「小栗様のネジ」が大活躍で小栗忠順が江戸城内の廊下で持ち歩いていたり、家康まで持って見せたり…。

▲小栗忠順（武田真治）

◆ネジは横須賀での特別展示が終了し、８月から東善寺での展示に戻りました。お待たせしました。

◆「小栗かるた」制作　たくさんの読み札候補

6月末で読み札の応募を締め切り、北海道から福岡県まで９６６作の応募がありました。ご応募の皆さんに御礼申し上げます。小栗上野介顕彰会では慎重に検討して、識者の意見も加えて最終決定し、画家への絵札制作の依頼、印刷を経て来年6月の完成を目指しています。戦後の郷土復興を願って創られた「上毛かるた」以来、国内有数の「カルタ王国群馬」に小栗カルタが加わります。

◆本『薩長史観の正体』　武田鏡村・東洋経済新報社

明治政府は幕末以来の歴史をゆがめて教えてきた。例えば
「薩長史観：幕臣の小栗上野介忠順は新政府に抗した重罪人で、斬首されても当然である
真　相：小栗忠順は日本の近代化の基礎をつくった大先駆者で、暴虐な薩長の体質を看破した憂国の士であった」　P142より
―など例を挙げさらに個別に詳しく解説する展開が読み易い。

◇幕末の歴史・小栗上野介ファンの方へ　　会員になってください――東善寺「たつなみ会」

倉渕町の小栗上野介顕彰会ではさまざまな顕彰活動をしていますが、地域の人口減で顕彰会員が減っています。東善寺の「たつなみ会」会員には顕彰会機関誌『たつなみ』を発行のつど顕彰会から購入してお送りし、誌代が顕彰会の活動資金に役立っています。また東善寺発行の「小栗上野介情報」や「東善寺だより」などで、小栗上野介・幕末関連の最新情報をお送りします。　□たつなみ会**会費　年1800円**　**お申込み**：東善寺へメールまたは電話、ハガキで